

There 存在文の意味論と英和辞書記述への提案¹

岩崎 永一 (Eiichi Iwasaki) *

早稲田大学商学部 (非常勤) / School of Commerce, Waseda University, Tokyo, Japan

(Received 29 November 2015; Final version received 18 April 2016)

In this article, I discuss *there*-existential sentences, taking Nishiyama (2003; 2013) as a starting point. Firstly, I review Nishiyama's (*ibid.*) three types of *there*-existential sentences. Next, I argue that *there* in every type of this construction is a word which includes a variable, emphasising that a new piece of information is not necessarily presented by a post-copula noun phrase which specifies the value of a variable as to a relevant propositional function. Furthermore, I argue that some types of *there*-existential constructions employ a metaphoric extension of a place-phrase, making the sentence more abstract, and that one type of *there*-existential sentence cannot entail any phrase that specifies the values over which a variable can range. Finally, I summarise the main arguments of this paper, and propose some suggestions on the possible description of this construction in an English-Japanese dictionary.

本稿では西山(2003; 2013)で議論されてきた *there* 存在文について議論する。まず、西山 (*ibid.*) の場所存在文、絶対存在文、帰属存在文、リスト存在文の分類・分析について確認する。次に本稿の対案を提示する。その際に、*there* 存在文と名詞句先導型存在文(名詞+繫辞+場所句)の違いを確認する。次に、*there* が変項詞であることを主張し、その後、絶対存在文だけでなく場所存在文も、西山 (*ibid.*) の主張と異なり、変項詞を含むことを主張する。その後、場所存在文と西山 (*ibid.*) が場所存在文ではないと主張する存在文について比較し、後者も前置詞句にメタファーを用いられていると考えれば、場所存在文の一形態であると考えることができる、と主張する。次に、領域限定辞は絶対存在文には付与できないことを主張し、さらに、リスト存在文についても変項詞の観点から分析する。最後に結論と英語辞書記述への示唆を述べる。

1 はじめに

畠山 (2004) は *there* 存在文について、*there* の「関連詞 (associate)」を場所句で

¹ 本稿は日本第二言語習得学会夏季セミナー (2015年8月18日、於・八王子セミナーハウス) と駒場言葉研究会 (2015年11月22日、於・東京大学駒場キャンパス) にて口頭発表した内容を加筆・修正したものである。前者では、時間の都合上、質疑応答の時間は省略されたが、後者にてコメント等をくださった Tom Gally 先生、菅野憲司先生はじめ参加者の皆様に御礼申し上げます。また、英文要旨について、Chris Cummins 先生に有益なご示唆を頂いた。以上の方々に記して御礼申し上げます。ただし、残る問題点等はすべて執筆者の責任である。

*Email: e.iwasaki@aoni.waseda.jp

© Published by Komaba Language Association. 2016

3-8-1 Komaba, Meguro-ku, Tokyo 153-8902, Japan.

ある前置詞句であると主張している。これは、久野（1973, p.288）のように *there* 存在文については場所句が明示的に書かれていない場合でも、それが隠れているという立場と同じである。このような畠山 (*ibid.*) や久野 (*ibid.*) の理論的立場は西山 (2003; 2013) の主張するような絶対存在文、すなわち、場所句が音声形式上のみならず、意味のレベルでも表示されない存在文を説明することができず、不十分である。西山 (*ibid.*) が主張するような変項を含む名詞句を用いてこそ、このようなタイプの存在文を的確に説明することができる。

しかし、絶対存在文やその他の存在文について、本稿は西山 (*ibid.*) とは、その変項を含む句の設定の仕方が異なる。本稿ではそれぞれの存在文について、西山 (*ibid.*) の主張を確認した上で本稿独自の提案を提示する。

特に、本稿では、岩崎 (2015) による、*there* が「変項詞」とあるという指摘を敷衍させ、西山 (2003; 2013) が「絶対存在文」、「リスト存在文」と呼ぶ構造について英語の *there* 存在文を分析する。

本稿の構成は以下の通りである。まず、第2章では西山 (2003; 2013) の場所存在文、絶対存在文、帰属存在文の分類を確認する。第3章では本稿の対案を提示する。第4章では結論を述べる。

2 西山 (2003; 2013)

2.1 場所存在文

まず、西山 (2003; 2013) の場所存在文について確認する。西山 (2013, p.253) は場所存在文として以下の例を挙げている。

(1) (a) There is a cat on the mat.

(b) A cat is on the mat.

西山 (*ibid.*) は *there* 存在文と「名詞句 + *be* 動詞 + 場所句」という本稿が「名詞句先導型存在文」と呼ぶ構造の両方を区分することなく、場所存在文に含めていることに注意しよう。

場所存在文では名詞句（上の例では *a cat*）は指示的名詞句であり、変項名詞句は関与しない。そして、前置詞句は場所句である。

2.2 絶対存在文

次に、絶対存在文について西山 (*ibid.*) の分析を確認する。西山 (2013, p.261) は久野 (1973, p.288) の場所存在文的な分析を批判し、以下の文は場所句を持たない絶対存在文として分析している。²

² 他に Abbott (1993, p.43, n. 6) の挙げる下記の文も絶対存在文の解釈を持ち得るだろう。

(i) There are songs to sing and books to read.

- (2) There are many people who don't like rice. (久野 1973, p.288)

西山 (*ibid.*, p.262) は (2) の **people don't like rice** は変項名詞句であり、以下のような命題関数を有すると主張している。

- (3) [x are people who don't like]

ここで注意すべきは西山 (*ibid.*) は英語の **there** 存在文が絶対存在文である場合には「**there + be** 動詞 + 名詞句」における名詞句を変項名詞句であると主張し、その変項 **x** を埋める値が、西山 (*ibid.*, p.262) の言う「領域限定辞」(ここでは久野 (*ibid.*) の言う **in the world** のようなもの) の制約を受けつつ、存在する、と主張している。西山 (*ibid.*) によれば、この領域限定辞が場所句ではないのが、絶対存在文である、ということである。彼の絶対存在文分析の特徴を纏めると以下のようなになる。

- (4) 西山の絶対存在文分析 (英語 **there** 存在文の場合)
 (a) 「**there + be** 動詞 + 名詞句」の名詞句が変項名詞句である。
 (b) 場所句ではないが、変項の取り得る値が領域限定辞の制約下にある。

2.3 帰属存在文

さらに、場所存在文でも絶対存在文でもないものとして西山 (2003; 2013) は「帰属存在文」を挙げている。西山の例は以下のようなものである。

- (5) この店に、私の欲しい皿がある

これは場所存在文としても絶対存在文としても読むことも可能であるが、帰属存在文としても読むことが可能である、というのが西山 (*ibid.*) の主張である。帰属存在文の場合、西山 (*ibid.*) の主張では「この店に」は場所句ではなく、カタログ等の「この店で扱っている商品のなかに」という意味である。そのため、西山によれば、(5) は場所存在文ではない。次に、「私の欲しい皿」はカタログ等にある特定の「私の欲しい皿」を指示しており、指示的名詞句であり、変項名詞句ではないため、(5) は絶対存在文でもない、というのが西山 (*ibid.*) の主張である。

以上の西山 (*ibid.*) の主張を下記の英文に当てはめて考えてみよう。

- (6) There is [the book that I have long wanted] in this shop.

この文は場所存在文として読むことも絶対存在文として読むことも可能である。まず、**in this shop** を「このお店が扱っている商品の中に」という場所句ではない句と解釈すると場所存在文でもない。さらに、**the book that I have long wanted** を「私が長い間欲しかった本」という指示的名詞句として解釈すると、変項名詞句とは解釈できないため、絶対存在文でもない。以上が西山 (*ibid.*) の主張に従った (6) の分析

である。結果として、(6) は西山 (*ibid.*) の主張する帰属存在文である。

以上、見てきたように、西山の分析では絶対存在文にのみ変項名詞句が現れ、場所存在文と帰属存在文では変項名詞句が現れないことがポイントである。

2.4 リスト存在文³

次に、西山 (2003; 2013) のリスト存在文の分析について確認する。西山 (2013, p.303) が Abbott (1993, p.44) から引用し議論している以下の対話を考察しよう。

(7) Speaker A: What can I use to prop open the door?

Speaker B: There's the book on the table.

西山 (*ibid.*) によれば、リスト存在文は変項名詞句の変項 x の値を埋める値が存在し、それが *there* 存在文に名詞句として具体化している、ということである。ここで、Ward & Birner (1995, p.735), Huddleston & Pullum (2003, pp.1399-1400), 西山 (2013, pp.303-304) が指摘するようにリスト存在文は、変項の値を埋める名詞句があればよいのであって、そのような名詞句が複数リストアップされる必要は必ずしもない。さらに、Ward & Birner (*ibid.*, p.736) や西山 (*ibid.*, pp.299-300) が指摘するように、リスト存在文は、「値の存在を肯定的に主張する構文である以上、否定文になることはない」(西山 *ibid.*) ことに注意しよう。

ここで注意すべきことは、西山 (2003, p.413) は以下のように述べ、リスト存在文では変項名詞句が顕在化していない、と主張している点である。

リスト存在文の背後には、かならずなんらかの変項名詞句が介在しているわけであるが、注意すべきは、その変項名詞句を表現形式の上で明示せず、聞き手(あるいは読み手)にコンテキストから語用論的に推測させているという点である。つまり、いかなる変項名詞句が介在しているかがコンテキストから容易に復元できるばあいにかぎり、この種の存在文が使用可能となる。【「ばあい」の表記は原典による。】

西山 (2013) は上記の (7) について命題函数を明示していないが、文の意味として「ドアを支えて開けた状態にしておくのに、使えるものとしてテーブルの上の本がある」と説明している。したがって、(7) の当該の命題函数は[ドアを支えて開けた状態にしておくのに、使えるものとして x がある]となり、その変項 x の値が *the book on the table* だと西山 (*ibid.*) は主張していることになる。同様の分析は Ward & Birner (*ibid.*, pp.734-735) にも見られる。そして、西山 (*ibid.*) は上記のような命題函数は「コンテキストから語用論的に推測」する必要がある、と主張している。西山のリスト存在文の分析を纏めると以下のようなになる。

³ 岩崎 (2015, p.34, n.14) にも、リスト存在文に関する萌芽的指摘があるが、本稿はそれをさらに敷衍させるものである。

- (8) 西山のリスト存在文分析（英語 *there* 存在文の場合）
- (a) 変項名詞句は文の中に顕在化していない。
 - (b) そのため、文脈から妥当に推測して変項名詞句を作る必要がある。
 - (c) 「*there + be* 動詞 + 名詞句」の名詞句は変項名詞句でなく、(b) で作られた変項名詞句の変項を埋める値である。

上記の西山 (*ibid.*) のリスト存在文分析は (4) で見た彼の絶対存在文分析とは、「*there + be* 動詞 + 名詞句」の名詞句の扱いについて大きく異なることに注意しよう。絶対存在文では当該の名詞句が変項名詞句であったのに対し、リスト存在文では値名詞句となっているのである。

3 分析

3.1 *There* 存在文と名詞句先導型存在文

次に、本稿の主張を提示する前に以下の二つの構造の違いを確認しよう。本稿では以下の (9b) のタイプを「名詞句先導型存在文」と呼ぶこととした。

- (9) (a) *There is a book on the table*（絶対存在文と場所存在文の両方）
- (b) *The book is on the table*（場所存在文のみ）

上記 (9a) の *there* 存在文は絶対存在文と場所存在文両方の解釈が可能であるのに対して、(9b) は可視的な場合のみに可能であり (cf. Hannay & Caro 2008, p.63 とそこで引用されている文献も参照されたい)、視覚的情報を情景描写する「存現文」(西山 2003, pp.399-401) に近い。言い換えれば、(9a) は命題を述べているのに対し、(9b) は情景を描写しているのである。情景描写の場合、描写する場所が必要であるから、場所句を必然的に伴い、そのような存在文は場所存在文である。その一方、命題を表す場合には場所句を伴う場合と (例えば) 同じ前置詞句でも、場所句でない解釈 (西山 2003; 2013) の場合がある。これは西山が (日本語の) 存在文は場所存在文と絶対存在文で曖昧 (西山 2003, pp.407-412; 西山 2013, pp.262-265) である、と主張しているのと整合性を持つ。

3.2 変項詞としての *there*⁴

今まで見たように西山の主張では *there* 存在文の変項名詞句は *be* 動詞直後の名詞句であった。それに対して、本稿では *there* が変項詞で、*there* 存在文が広義の指定文 (ここでは変項を含む句と値名詞句の両方を持っているという意味での指定文) である、と主張する。⁵例えば、(倒置) 指定文とは以下のような文である。

⁴Abbott (1993, p.41) は一部のアフリカ系アメリカ英語では *there is* の代わりに *it is* が使用される場合があると報告している。

⁵変項名詞句は *it* で受けることが可能である (Declerck 1983) あるが、ここでは *there* は変項詞であって、変項名詞句ではないため、*it* で受けることができなくとも問題ない。

(10) The winner is John.

ここで **the winner** は特定の指示対象を指示することなく、[x が優勝者だ]という命題関数を表し、その変項 x の値が **John** によって指定される、というものである。以上の（倒置）指定文の考え方は西山（2003; 2013）, Nishiyama（2008）にすべて負っている。

さらに、岩崎（2015）では非指示的な **the** は変項の個数と変項の値の個数がそれぞれ一つである（と見込まれる）ことを要求する、と主張している。Rando & Napoli（1978, p.308）は当該の **there** について“definite in form (witness the *th* in *there*), ...”[イタリックは原典による]と指摘しており、仮にこの指摘が妥当であれば、当該の **there** は非指示的な **the** と同様な（あるいは類似しつつ、一部、異なる）条件を、変項の個数と変項の値の個数について要求する、という見通しが成り立つ。

さらに当該の **there** が変項詞であることの更なる証拠がある。

(11) (a) Some students_i believe that some students_i are running the show.

(b) *Some students_i believe that there are some students_i running the show.

(Bresnan 1970 cited in Rando & Napoli 1978, p.310, n. 13)

上記の (11b) において、補文内の **some students** は **there** の値名詞句であり、変項詞 **there** と主節の **some students** は人称、数、性の ϕ 素性が一致しないため同一指標の関係にない以上、2つの **some students** は同一指標にはなり得ない。もし、補文内の **some students** が **there** の値名詞句でなければ、2つの **some students** は同一指標になり得るはずである。したがって、上記の (11b) の非文法性は **there** が変項詞である可能性を支持するものである。

そして、**there** が変項詞であるという仮定のもとで本稿ではその命題関数の変項が「**there + be** 動詞 + 名詞句」の名詞句で埋められる、と主張する。したがって、絶対存在文とリスト存在文で当該の名詞句の扱いの異なる西山 (*ibid.*) とは本稿は異なり、以下のような統一的な分析が絶対存在文やリスト存在文で成立する、と主張する。

(12) There + be 動詞 + 名詞句

[変項詞] [値名詞句]

命題関数: [...x が...存在する]

x は値名詞句によって指定される。

これは西山（2003; 2013）の倒置指定文分析と同じである。（ただし、命題関数の中身を除く。）本稿は **there** 存在文が広義の倒置指定文の一タイプであると主張しているのである。ここで「倒置」という術語は表層上の語順が倒置指定文と同じであると主張しているだけで、**there** そのものが倒置名詞句（ここでは変項名詞句）のよう

に倒置されているわけではないことに注意しよう。さらに、本稿は西山 (*ibid.*) と異なり、絶対存在文やリスト存在文だけでなく、場所存在文や西山 (*ibid.*) が帰属存在文と呼ぶ存在文にも、変項詞とその命題関数が関わっていると主張する。本稿は **there** が変項詞である、と主張しているため、これは当然の理論的帰結である。そして、指示的名詞句が統語的な主語位置を占める叙述文は (9b) のみである、と本稿は主張する。

3.3 命題関数の値名詞句と新情報を伴う名詞句の違い

Ward & Birner (1995) や久野・高見 (2004) 始め多くの先行研究では **there** 存在文のコピュラ直後の名詞句について聞き手にとって新情報を伴う、と主張している。一方、本稿では命題関数の変項を指定する値名詞句であると主張している。⁶ すなわち、本稿は値名詞句は必ずしも新情報を持つとは限らない（もちろん、値名詞句が結果的に新情報を持つ場合もある）と主張する。例えば、以下のような例文を検討してみよう。なお、類似の“both you and I know there is ...”の構造はオンライン検索でも多数見つけることができる。

(13) Both you and I know there is a solution

この場合、「解決方法があるとあなた（聞き手）と私（話し手）が知っている」ということは「解決方法」は話し手にとっても（そして、聞き手にとっても）新情報ではありえない、ということになる。このような状況下では、**a solution** 自体が旧情報である。ここでの **a solution** は話し手と聞き手が知っているためである。さらに、「[xがある]という命題関数の変項 x の値を埋めるのが **a solution** であるということ」(※) も話し手と聞き手が知っており、従って、※も新情報ではない。⁷ (13) のような例は決して周知的事象ではなく数多く存在することから、**there** 存在文のコピュラ直後の名詞句が聞き手にとっての新情報を表すという一般化を受け入れることは難しいと本稿では考える。

なお、**there** 存在文のコピュラ直後の名詞句が聞き手にとっての新情報を表すことも確かに多い。しかし、それはあくまでもコピュラ直後の名詞句が値名詞句であるという意味論レベルの一般化の結果、語用論的にたまたま派生的に生じることに過ぎない。(13) のような周知的とは言えない例が存在するという事は、そのような一般化が妥当ではなく、その代替となる一般化が必要である、ということを示している。そこで、本稿では、**there** 存在文のコピュラ直後の要素は命題関数の変項を指定する値名詞句であると主張する。

⁶ Ward & Birner (1995, pp.734-735) はリスト存在文について、**open proposition** の変項をコピュラ直後の名詞句が指定すると主張している。しかし、その名詞句が聞き手にとっての新情報を伴うと主張している点が本稿の主張とは異なる。

⁷ 本稿とは主張は異なるが関連の議論が Randon & Napoli (1978, p.308) にも見られる。

3.4 場所存在文と絶対存在文

3.4.1 絶対存在文

次に以下の例文について議論する。(14a)は(14b)の西山の対応する日本語文を英語にしたものである。

- (14) (a) There is a prime number between five and ten.
 (b) 5と10のあいだに素数がある. (西山 2003, pp.403-404) [下線も原典による]

西山 (*ibid.*)は(14b)が以下の意味を有する絶対存在文であると主張し、(14b)の下線部は場所句ではないため、(14b)は場所存在文ではないと主張している。

- (15) [xが、5と10のあいだの素数である]を満たすxの値が空ではない。(西山 *ibid.*, p.404)

西山の以上の主張を(14a)の英文に当てはめると(14a)の **a prime number between five and ten** は以下の(16a)の命題関数を持つこととなり、(14a)は全体で(16b)の意味を持つことになる。

- (16) (a) [x is a prime number between five and ten]
 (b) [x is a prime number between five and ten]の変項 x を満たす値が存在する。

したがって、この読みの場合、(14)の **a prime number between five and ten** が一つの名詞句を形成することに注意しよう。

3.4.2 疑似場所存在文

しかし、(14a)には別の読みが存在する。それは(14a)を以下の(17)として言い変えることの出来る読みである。

- (17) Between five and ten, there is a prime number.

この場合、**between five and ten** を場所句ではないとすれば、(17)は場所存在文ではない。しかし、西山(2003, p.396)の考え方に依拠すれば、特定あるいは不特定に関わらず、名詞句が指示的になる場合があり、(17)に関する限り、**a prime number** は数字を指示していると本稿は考える。すると、これは西山の言う帰属存在文ということになる。ただし、(17)の **a prime number** が本当に指示的かどうかは議論の余地があるだろう。

上記の(17)と統語構造的にはよく似た(18)を検討してみよう。

- (18) Between Osaka and Tokyo, there is a beautiful city.

この場合、**between Osaka and Tokyo** は場所句であり、**a city** とは京都であれ、名古屋

であれ、静岡であれ、その他の都市あれ、大阪と東京の間に位置するいずれかの都市であろう。この場合、上記の *a beautiful city* は指示的であると言えるだろうか。さらに以下の例を考えよう。

- (19) (a) *Between Osaka and Tokyo, there might be a beautiful city.*
 (b) *There might be a beautiful city between Osaka and Tokyo.*

この場合、推定を述べているわけであるから、*a beautiful city* は指示的とは言い切れないだろう。

すると、英語の *there* 存在文には「場所句 (+ 助動詞) + *be* 動詞 + 非指示的な名詞句」という構造があることになる。これは西山 (2003; 2013) の分類では扱えないことになる。その難点が生じる理由は、西山 (*ibid.*) が *be* 動詞直後の名詞句の指示性・非指示性によって、場所存在文と絶対存在文の区分を行っているためである。

西山 (*ibid.*) と異なり、本稿では *there* は変項詞であり、変項を含む命題函数の意味を有し、その変項の値は *be* 動詞直後の名詞句によって指定される、と考える。すると、(17) , (18) はそれぞれ以下の意味を持つ。

- (20) (a) *there* は[x が 5 と 10 の間にある]という命題函数の意味を有する変項詞であり、その変項 *x* の値が *a prime number* によって指定される。
 (b) *there* は[x が大阪と東京の間にある]という命題函数の意味を有する変項詞であり、その変項 *x* の値が *a beautiful city* によって指定される。

このように本稿の提案する分析を用いれば、前置詞句が場所句である場合でも、そうでない場合でも統一的に処理することができる。本稿では (17) の *between five and ten* が数字を地理的空間に喩えたメタファーであると捉え、このような表現を含む *there* 存在文を「疑似場所存在文」と呼ぶことにする。

場所存在文や疑似場所存在文にも変項名詞句が含まれているとなぜ想定するかと言えば、(1b) のような名詞句先導型存在文と区別し、情景描写ではなく (すなわち、可視的な情報を直接伝えているのではなく)、命題を表している点で、変項を関与させることは理に適っているためである。

さらに、*there* 存在文において、ある前置詞句が場所句であるか、そうでないかは語用論的に決定されることであり、したがって、西山 (*ibid.*) の分類は語用論的な分類であり、本稿が企図したのは意味論的な分類である。意味論的には場所存在文も帰属存在文も同様の分析を受けるのである。西山 (*ibid.*) のように *there* 存在文の場所存在文も変項名詞句を含まないとすると、*there* 存在文の場所存在文と名詞句先導型存在文との違いを意味論レベルで保障できないという重大な問題が生じる。この点、本稿では *there* 存在文の場所存在文では変項詞 *there* を含み、広義の倒置指定文の読みに還元されるのに対して、名詞句先導型存在文では繫辞前の名詞句は指示的な名詞句であり、名詞句先導型存在文は叙述文である。

3.4.3 領域限定辞は絶対存在文に付与できるか

次の例を見てみよう。

(21) (a) あの大学にノーベル賞受賞者がいる。(西山 2013, p.263)

(b) There is a professor who won the Nobel prize at the university. (熊本 2005, p.4)

西山 (*ibid.*) は (21a) の日本語文について議論しているが、「英語の (21b) [原典の番号変更]も同様の曖昧性をもつ」と述べている。そのため、西山の (21a) に関する議論をもとに、(21b) が西山の分析方法ではどのように分析されるか検証してみよう。

まず、(21b) を絶対存在文として読んだ場合には **a professor who won the Nobel prize** が [x is a professor who won the Nobel prize] という命題関数を有する変項名詞句であり、その「変項 x の値があの大学のスタッフの中に存在する」[下線を原典に追加] という意味を表す、と西山 (*ibid.*) は主張している。

しかし、場所句ではないが、領域限定辞「あの大学のスタッフの中に」が入っており、「絶対存在」という名称に相応しいか疑問である。本稿の理論的立場から言えば、絶対存在文とは限定領域辞なしで、変項を指定する値の存在の有無のみを述べる文である。(変項を指定する値の存在の有無については西山 (2013) を参照されたい。) 例えば、(14a) の場合には **between five and ten** は **a prime number** を修飾しており、すなわち、**a prime number between five and ten** 全体が名詞句を形成していると考え、対応する日本語文 (14b) の西山の分析すなわち (15) に依拠し、(14a) を絶対存在文として分析することに問題はない。(14a) では **between five and ten** は限定領域辞ではないのである。

本稿では絶対存在文の変項には領域限定辞が付与されない、という立場を取り、そのために、以下のような分析を提案する。すなわち、**there** が変項詞であり、命題関数 [x is a professor who won the Nobel prize at the university] の意味を有し、その変項 x を指定する値が存在する、という意味を文全体が持つ。ここで、**at the university** が **a professor (who won the Nobel prize)** を修飾し、名詞句の一部であって、領域限定辞ではないことに注意しよう。

次に、以下の文を検討してみよう。

(22) 隣の部屋に、洋子の好きな作曲家がいる。(西山 2003, p.403)

西山 (*ibid.*) は「隣の部屋に」が場所句であり、「洋子の好きな作曲家」が(特定・不特定に関わらず)指示的名詞句であるとし、(22) が場所存在文であり、絶対存在文ではない、と主張している。(22) に対応する英文を検討してみよう。

(23) There is a composer that Yoko likes in the next room.

まず、この文が絶対存在文の場合には **there** が変項詞であり、[**x is a composer that Yoko likes in the next room**]という命題関数を有し、その変項 **x** を埋める値が存在する、という意味になる。この読みのもとでは、**in the next room** は領域限定辞ではなく、**a composer** を修飾していることに注意しよう。

次に、この文を場所存在文として読む場合には、**there** が変項詞であり、[**x is in the next room**]という命題関数を有し、その変項 **x** の値を埋めるのは **a composer that Yoko likes** である。

以上の本稿の分析を纏めると以下のようになる。

- (24) (a) [絶対存在文] 命題関数内であれ、その外であれ、領域限定辞が付与されない。
 (b) [場所存在文] 命題関数内、あるいは、その外に領域限定辞が付与される。

以上の分類は統語構造かつ意味論レベルの区分であり、そこには語用論的要因は介在しない。西山 (2003; 2013) が前置詞句を場所句かそうでないかをコンテキストに応じて区分しているのとは対照的である。

3.5 リスト存在文と定冠詞

既に確認したように西山 (2003; 2013) のリスト存在文分析では、変項名詞句がリスト存在文内部に表現されておらず、文脈によってそれを復元しなければならない、そして、そのような復元が可能な場合のみリスト存在文の読みが可能である、ということであった。

しかし、今まで本稿が主張してきたように **there** 存在文における **there** は変項詞であり、これはリスト存在文についても当てはまる。例えば、(7) (以下で (25) として再掲) の例について検討してみよう。

- (25) Speaker A: What can I use to prop open the door?
 Speaker B: There's the book on the table.

西山 (2013, p.303) は「<<ドアを支えて開けた状態にしておくのに、使えるものとしてテーブルの上の本がある>>を言わんとしている」と述べている。本稿流の立場で言えば、**there** は[ドアを支えて開けた状態にしておくのに、使えるものとして **x** がある]という命題関数の意味を有し、その変項 **x** の値が **the book on the table** で指定される、ということになる。

西山 (*ibid.*) は **the book** と **on the table** それぞれが別の構成素を形成しているのではなく、**the book on the table** を一つの構成素として見るべきである、と主張しているが、本稿では前者のようにその二つを別の構成素として見ることも可能であると考える。その場合、**there** は[ドアを支えて開けた状態にしておくのに、使えるものとして **x** がある]と[**x** が机の上にある]という2つの命題関数を同時に満たす解が **the book** である、ということになる。

上記の2つのいずれにせよ、変項詞は **there** であり、リスト存在文中に音声形式

上、存在する。リスト存在文中の特徴はむしろ、変項詞 **there** の命題函数の内容が一体何であるのかを構築するのが他の文と比べて難しく、リスト存在文の中だけで命題函数の内容を構築できない点にある。

したがって、既に引用した西山 (2003, p.413) の主張は英語のリスト存在文については以下のように修正されるべきであろう。(日本語のリスト存在文についてはここでは立ち入らない。)

英語のリスト存在文では、変項詞 **there** が顕在化しており、その命題函数の内容は **there** を含む文だけでは構築できず、その内容を [以下西山 (ibid.) を直接引用] 「聞き手 (あるいは読み手) にコンテキストから語用論的に推測させているという点」に特徴がある。[以下西山 (ibid.) を直接引用 (ただし、「命題函数」は原典では「変項名詞句」)] 「つまり、いかなる命題函数 [西山の原典は「変項名詞句」] が介在しているかがコンテキストから容易に復元できるばあいにかぎり、この種の存在文が使用可能となる。」

このようにリスト存在文では発話のコンテキストから **there** の命題函数の内容を構築できるか否かがその文の成立の可否を左右していると言える。さらに、変項を指定する値が繫辞の直後の名詞として具現化し、それが定名詞句となっており、**the** が付いている ((25B) の場合は **the book**)。

このように **there** を変項詞として捉える主張は従来のように **there** を虚辞と捉える主張とも、さらに、**there** を “dummy theme or topic” (Randon & Napoli 1978, p.308) と捉える主張とも異なる。これらの立場では、既に見た **there** が同一指標を阻止する例 (11) を説明することができない。

さらに、リスト存在文の **there** を場所を表す **there** と捉えるのも十分ではない。久野・高見 (2004) は **there** 存在文において **the** が出現するケースについて、(i) **there** が場所を表す **there** である構造と (ii) 当該の **there** が虚辞である構造の二つに分けて議論をしている。本稿は (i) は紙面の都合上、議論せず、(ii) について久野・高見 (ibid.) の主張を採択する。特に、久野・高見 (ibid.) の主張で興味深いのは以下の例文についてである。

(26) Speaker A: I guess everybody is here now.

Speaker B: No, there's still John and Mary.

(久野・高見 *ibid.*, p.157 [原典のフォント変更])

この場合、久野・高見 (ibid.) が説明するように、「まだここに来ていないのがジョンとメアリーだ」と言っているのだから、**there** が「ここ」であるという解釈は成り立たない。本稿の主張では[xがまだ来ていない人だ]という命題函数を有する変項詞としての **there** ということになる。

4 まとめ

4.1 結論

以上、本稿では「There + be 動詞 + 名詞句」について場所存在文、絶対存在文、帰属存在文、リスト存在文について西山（2003; 2013）を検証しながら、西山（*ibid.*）とは異なる主張を行った。以下、表 1 は西山（*ibid.*）の主張を本稿の執筆者が纏めたものであり、表 2 は本稿の主張を纏めたものである。

(27)表 1 「There + be 動詞 + 名詞句」について（西山 2003; 2013, 特に p.283, (94)）

	場所存在文	絶対存在文	帰属存在文	リスト存在文
変項名詞句	なし	名詞句	なし	なし
値名詞句	なし	なし	なし	名詞句
場所句	あり	なし	なし	なし
領域限定辞制約	なし	可能	なし	なし
名詞句の指示性	指示的	非指示的	指示的	指示的?

(28)表 2 「There + be 動詞 + 名詞句」について（本稿の主張）

	場所存在文	絶対存在文	帰属存在文	リスト存在文
変項詞	There			
値名詞句	名詞句			
場所句	あり	なし	なし	なし
領域限定辞制約	あり	なし	あり	可能
名詞句の指示性	指示的/非指示的			

上記の表 1 で「名詞句」とは「There + be 動詞 + 名詞句」の中の名詞句のことである。表 1 でリスト存在文の領域限定辞制約が「なし」になっているのは、西山（2013, p.303）では前置詞句も名詞句を修飾しているからである。また、表 1 の帰属存在文では場所句が「なし」となっているが、それは、西山（*ibid.*）の帰属存在文では場所句ではなく、「構成員の集合」（西山 *ibid.*, p.277）があるためである。

以上の表からも分かる通り、西山（*ibid.*）と比べて本稿の方が、変項詞と値名詞句、名詞句の指示性について統一的な分析となっている。西山（*ibid.*）は「There + be 動詞 + 名詞句」の「名詞句」の指示性・非指示性に基づいて、分類・議論を展開しているが、本稿は当該の「名詞句」の指示性・非指示性には依拠していない。さらに、西山（*ibid.*）は場所句かそうでないかという文脈に依存し語用論的要因によって分類をしているが、本稿ではそのような語用論的要因に拠らない意味論レベルでの分類をしており、そもそも場所句かそれ以外の疑似場所句か抽象的な集合的制約を表す句かは語用論的に決定されるのであり、命題関数という意味論レベルの概念

に持ち込むべきではない、と考える。意味論レベルでは表 2 のように明確な差異を出した表示をすべきである、とのというのが本稿の主張であった。したがって、語用論的要因による場所句の有無の分類を取り除けば、表 2 は表 3 のように修正され、場所存在文と帰属存在文は同じカテゴリーを形成する。

(29)表 3 「There + be 動詞 + 名詞句」について (本稿の主張)

	場所・帰属存在文	絶対存在文	リスト存在文
変項詞	There		
値名詞句	名詞句		
領域限定辞制約	あり	なし	可能
名詞句の指示性	指示的/非指示的		

純意味論レベルでの分類による表 3 を見れば、絶対存在文には命題函数の中であれ、その外 (すなわち、変項 x に係る制約) であれ、「なし」であるという点が他の存在文に比べて、最も特徴的であると結論付けられる。

本稿の **there** 存在文 (すべてのタイプ) についての主張を纏めると以下のようになる。

- (30) **There + be 動詞 + 名詞句**
 [変項詞] [値名詞句]
 命題函数: [...x が...存在する]
 x は値名詞句によって指定される。

最後に、谷口 (2004, p.75) は **there** 存在文の **there** の意味について、認知言語学の観点から図示している。すなわち、予め用意された「セッティング」(認知言語学の術語) が **there** の意味であり、そこに「未知のものを入れる」という図示を行っている。これは本稿で主張したような変項を含む変項詞としての **there** とその変項の値を埋めるコピュラ直後の名詞句という主張と類似性があるとも言える。ただし、この両者の整合性の精密な探求は別稿に論じることとしたい。

4.2 統語論への示唆

統語論への示唆として、領域限定辞を伴わない絶対存在文を畠山 (2004) のような、前置詞句を **there** の関連詞とする分析では扱うことができず問題であり、それに対応できる統語理論が求められる、ということが挙げられるだろう。

畠山 (*ibid.*, p.126) は存在文の論理形式の構造を以下のように主張している。

- (31)[_{IP} [_{location PP}] [_{I'} be [_{VP} *t*_{be} [_{Small Clause} theme NP *t*_{location PP}]]]]

本稿では **location PP** の位置に変項詞が位置するため、仮に上記の畠山 (*ibid.*) の分

析が IP 指定部の location PP と小節の中にあるその痕跡以外は正しいと仮定して、それを採択し本稿の主張を加味すれば、絶対存在文を除けば、以下のようなになる。

(32)[_{IP} 変項詞 [_I be [_{VP} *t*_{be} [_{Small Clause} theme NP PP]]]]

しかし、絶対存在文ではそもそも前置詞句 (PP) が存在せず、畠山 (*ibid.*) の分析では絶対存在文の構造を的確に捉えることができない。ここに畠山 (*ibid.*) の there 存在文分析の問題点がある。

さらに、統語構造だけでなく、意味についても畠山 (*ibid.*) の主張には問題が生じる。畠山 (*ibid.*, p.129) は「虚辞 *there* の意味内容と形式素性は、関連詞である場所 PP からもらい受ける」と主張し、さらに、*there* 存在文の *there* について「中身はないが形だけある」と主張している。しかし、本稿で見たように *there* は変項詞であり、そこには豊かな命題函数の意味が内包されているのである。

なお、Rando & Napoli (1978, p.312) や西山 (2013 他) が指摘するように、*there* 存在文と所有文の間には密接な関係があるが、所有文に変項詞が含まれているかどうかについては将来的研究課題としたい。

4.3 英語教育、特に辞書記述への示唆

There が本稿の主張するように変項詞である場合、極小の負荷で、極大の関連性 (= 認知効果) が得られるように (Sperber & Wilson 1986)、*there* が談話を結ぶ働きをしている。すなわち、*there* の命題函数は「x がありますよ」という情報を読者・聞き手に予め知らせ、そして、その変項の値を後続の文内の要素で指定している。したがって、「そこに」ではない代名詞としての *there* の辞書記述として以下を提案する。

(33)[x が (<...>という条件下で) 存在する]という意味を *there* は持ち、その x が *there* + *be* 動詞の直後の要素で指定される。<...>の条件は通常的不定冠詞を伴う名詞句が *be* 動詞直後に来る場合には、その後続の前置詞句によって規定される。この場合、*there* は「何かがある。そして、それは...」という意味を担うことで、突然、存在する名詞句を示す前に、予告する機能を果たす。定冠詞を伴う名詞句が *be* 動詞直後に来る場合には、<...>という条件は先行文脈によって制限されるため、*there* は先行文脈と *there* + *be* 動詞の直後の要素の円滑な橋渡しの機能を持つ。ただし、物語文冒頭の場合を除く。(例) *there lived an old man...*

上記の記載は、*The KLA Journal* の査読者が正しく指摘するように、辞書内の記述としてはやや複雑すぎる恐れがある。その場合、(33) 内の最初の文と第二文を削除し、さらに第三文の「この場合」も削除するということが考えられる。さらにより簡潔な記述があれば望ましいが、その点は将来的研究課題としたい。その際、変項を辞書記述に含めるべきか、という点が議論となるだろう。数学の教科書に変数が登場しないことは通常ありえないことを考えれば、自然言語の辞書に変項を含める可能性も直ちに棄却されるべきではないが、この点も将来的課題として保留したい。

上記の辞書記述の提案は *there* の意味をその日本語訳だけでなく、前後の文脈を踏まえた機能的観点から述べている点に特徴があり、それは本稿で議論した *there* の言語理論的特徴を受け継いでいる。このように言語理論が英和辞書の記述に貢献できる可能性を探ることは *there* のみならず有益だと言えるだろう。

付録: 場所存在文における変項名詞句

最後に以下の興味深い例文について付記しておきたい。

(34) *There was the usual crowd at the beach today.* (Ward & Birner 1978, p.733) 【イタリック追加】

Ward & Birner (*ibid.*) , Huddleston & Pullum (*ibid.*) によれば、*the usual crowd* の構成員は昨日いた群衆と一部異なるという解釈も可能である。仮に (34) に西山 (2003; 2013) の分析を適用すると、第一に、場所存在文の読みがあり、その場合、*the usual crowd* は指示的となる。第二に、絶対存在文の読みがあり、その場合、*the usual crowd* は[x が (ビーチにいる) いつもの群衆だ]という命題関数の意味を有し、当該の文全体はそのような x を満たす値が存在する、という意味になる。以上が西山 (*ibid.*) の主張を (34) に当てはめた場合である。

しかし、このような二つの読みには問題がある。場所存在文の読みではビーチにいる群衆の一部が昨日ビーチにいた群衆と異なる、という読みを担保できないだろう。群衆の一部が入れ替わるという読みは西山 (2003) の変化文読みに対応する。以下が変化文の例である。

(35) 洋子の一番好きな作曲家が変わった。 (西山 *ibid.*, p.101) 【下線部も原典による】

西山 (*ibid.*) によれば、(35) の下線部の「作曲家」がある人物から別の人物に入れ替わる読みが可能であるのは下線部が非指示的な場合、すなわち、変項名詞句の場合である。同様に、(34) においても、群衆の一部が入れ替わったという読みが可能になるためには下線部が非指示的な変項名詞句である必要がある。したがって、当該の下線部が指示的な名詞句である場所存在文の読みでは群衆の一部が入れ替わったという読みは不可能である。一方、絶対存在文の読みでは群衆の一部が入れ替わったという読みが可能である。しかし、絶対存在文では (34) の *at the beach* を場所句であると解釈することができない。変項 x の値を制約する領域限定辞(西山 2013) であると解釈することも理論的には可能であるが、(34) で問題にしている解釈にそぐわない。*At the beach* を領域限定辞であると解釈すると、「群衆というものが存在し、その存在する領域は *at the beach* である」となる。しかし、(34) で問題になっている解釈は「ビーチに昨日と同じような (すなわち、完全に構成員は同じではないにしても、昨日と似たような) 群衆がいる」という意味である。⁸ 一般的な群

⁸ Ward & Birner (1995, p.733, n. 9) は、Barbara Abbott に帰して、(27) “can mean either that the same general

衆というものの存在の可否を問題にしているのではない。したがって、(34) を絶対存在文として解釈した場合でも場所句を扱うことができず、問題が生じる。

結局、西山の場所存在文と絶対存在文の分析では(34)を適切に捉えることができず、これは西山の分析に問題があることを示している。とりわけ、コンピュータ直後の名詞句が指示的名詞句か変項名詞句かによって、場所存在文(と帰属存在文—ここでは無関係のため、深入りしない—)と絶対存在文を分類していることが(34)を適切に捉えることを困難にしていると言えるだろう。

対して、本稿の分析では(34)の解釈に何らの問題も生じない。本稿の分析は次のようになる。Thereが[xがビーチに存在する]という命題関数の意味を有し、その変項xの値がthe usual crowdによって指定される。(本稿の分析では場所存在文において、場所句は命題関数内のxの存在する場所を示す場所句としても機能していることに注意しよう。)さらに、このthe usual crowdが変項名詞句として機能している。

⁹ その命題関数は[xがいつもの群衆だ]と[xとyとzと...がいつもの群衆だ]の二通りの可能性があるが、非指示的なtheがついていることにより、変項と変項の値がそれぞれ一つであることが要求され(岩崎 2015)、後者は排除される。変項がx一つのみであるため、その変項を埋める値はセットであることが要求される(岩崎 *ibid.*)。

¹⁰ すなわち、「ビーチにいる複数の人々」がセットで変項xの値となる。このときに「昨日ビーチにいた複数の人々」のうち、全員ではないが、大半がセットで[xがいつもの群衆だ]の変項xの値を指定する。

引用文献

- Abbott, Barbara (1993) A pragmatic account of the definiteness effect in existential sentences. *Journal of Pragmatics* 19, pp.39–55.
- Bresnan, Joan (1970) Argument against pronominalization. *Linguistic Inquiry* 1, pp.122-123.
- Declerck, Renaat (1983) “It is Mr. Y” or “He is Mr. Y”? *Lingua* 59, pp.209-246.
- Hannay, Mike & Elena Martínez Caro (2008) Last things first: An FDG approach to clause-final focus constituents in Spanish and English. In Gómez González, María de los Ángeles (eds.) *Languages and Cultures in Contrast and Comparison*. (pp.33-68) Amsterdam: John Benjamins.
- 岩崎永一 (2015) 『英語定冠詞とコンピュータの意味論—背後に潜む自然数概念—』 東京: 金星堂.
- 畠山雄二 (2004) 『英語の構造と移動現象—生成理論とその科学性—』 東京: 鳳書

crowd was at the beach again today, or else it can mean that there was a crowd at the beach today, as usual. It is the first reading that concerns us here.”と記している。

⁹ 2階の変項名詞句(峯島 2013)を参照されたい。ただし、thereは変項詞であり、変項名詞句ではない。

¹⁰ これは「統合的スキーマ」(山梨 1995, p.127; 2000, p.77)に近いと言えるが、両者は独立の概念である。いずれにせよ、この点は本稿の範囲を超え、別稿での精査に譲りたい。

房.

Huddleston, Rodney & Geoffrey Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

熊本千秋 (2005) 「存在文と指定文の接点をめぐって」『九州英文学研究』(日本英文学会九州支部) 6 (1), pp.111-127.

久野暲 (1973) 『日本語文法研究』東京: 大修館書店.

久野暲・高見健一 (2004) 『謎解きの英文法 冠詞と名詞』東京: くろしお出版.

峯島宏次 (2013) 変項名詞句の階層. 西山佑司編著. 『名詞句の世界: その意味と解釈の神秘に迫る』(pp.407-430) 東京: ひつじ書房.

西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論: 指示的名詞句と非指示的名詞句』東京: ひつじ書房.

Nishiyama, Yuji (2008) Non-referentiality in certain noun phrases. In Tetsuya Sano et al. (eds.), *An Enterprise in the Cognitive Science of Language*. (pp.13-25) Tokyo: Hituzi Syobo.

西山佑司 (編著) (2013) 『名詞句の世界: その意味と解釈の神秘に迫る』東京: ひつじ書房.

Rando, Emily & Donna Jo Napoli (1978) Definiteness in *there*-sentences. *Language* 54, pp.300-313.

Sperber, Dan & Deirdre Wilson (1986) *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.

谷口一美 (2004) 「行為連鎖と構文 I」中村芳久 (編著) 『認知文法論 II』シリーズ認知言語学入門第5巻. (pp.53-87) 東京: 大修館書店.

山梨正明 (1995) 『認知文法論』東京: ひつじ書房.

山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』東京: くろしお出版.

Ward, Gregory & Betty Birner (1995) Definiteness and the English existential. *Language* 71, pp.722-742.